様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　５月　２８日現在

機関番号：３２６８９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010 ～ 2012
課題番号：22530199
研究課題名（和文）　経済危機と経済学：１９７０年代日本のマクロ経済思想と経済政策の歴史的考察
研究課題名（英文）　Economic Crises and Economics: Historical Investigations of Macroeconomic Though and Economic Policy in Japan during the 1970s
研究代表者
若田部　昌澄　（WAKATABE　MASAZUMI）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：00240440

研究成果の概要（和文）：

1970 年代日本のマクロ経済思想と経済政策の関係について歴史的な考察を行った。この場合の歴史的というのは、経済史的な事実を踏まえるだけではなく、経済学史、経済思想史的な観点から、当時のマクロ経済政策を分析することを意味している。この研究では、大きく言って三つの成果を得た。第一に、1970 年代の大インフレはそれを許容する経済思想のもとで生まれた。当時の政策担当者の間においてはインフレを許容する思想が強かった。為替政策については円高を恐れる発想が強く、財政政策については福祉国家建設が。第二に、日本銀行においては複数の思想があったものの、70 年代の経験を通じて物価安定化を強調する思想が強化されることになった。第三に、国際通貨制度の変化に対して当時の政策担当者、経済学者は一部の例外を除いてブレトン・ウッズ体制を前提としており、それが 70 年代大インフレに貢献したと考えられる。

研究成果の概要（英文）：

I have conducted a research on the relationship between macroeconomic thought and policy in Japan during the 1970s from a historical perspective. This study emphasizes the history of economics or economic thought as well as economic history. This study has produced three sets of tentative conclusions. First, the Great Inflation during the 1970 was fostered in the intellectual atmosphere among the policymakers and economists in which inflation was allowed. Especially, they were fearful about the detrimental effects of the appreciation of the yen in exchange rate policy, and were supportive of expansionary fiscal policy with a view to building a “welfare state”. Secondly, there were several strands of economic thought in the Bank of Japan, but after the Great Inflation, the idea of price stabilization would be strengthend. Thirdly, the policymakers and the economists alike, with the exeption of minority group, took it for granted the Bretton Woods system, and did not take the possibility of moving to a flexible exchange rate system seriously.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：経済学史
科研費の分科・細目：経済学史
キーワード：経済学史、経済政策、日本経済、1970 年代

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者は、研究代表として基盤研究（C）平成 18 年度－20 年度。研究課題「経済危機の歴史政治経済学：大恐慌期の経済政策と経済学」の交付を受けてきた。この研究では、１９３０年代の大恐慌という現代史上最大級の経済危機を経済事象、経済政策、経済政策思想の相互依存関係から分析したものである。今回応募する研究課題は、これまでの研究課題の着想の延長線上にあると同時に、それを発展させたものである。経済危機は歴史上何度も起きてきた。そして経済学はそうした危機から何事かを学んできた。ところで最近ではマクロ経済政策思想史の焦点は、現代へと移ってきている。とくに研究が盛んなのはアメリカである。ことにクリスティーナ・ローマー（現在大統領経済諮問委員会委員長）とデイヴィッド・ローマー（カリフォルニア大学バークリー校）による研究である（Romer, Christiana (2007), “Macroeconomic Policy in the 1960s: The Causes and Consequences of a Mistaken Revolution,” Economic History Association Annual Meeting, September 2007.Romer, Christiana, and David Romer (2002), “The Evolution of Economic Understanding and Postwar Stablization Policy” in *Rethinking Stabilization Policy*, Federal Reserve Bank of Kansas City. http://emlab.berkeley.edu/users/cromer/fed_kc.pdf)。彼らはマクロ経済政策の成果に影響を及ぼしている思想の影響を強調していて、本研究にとっても有益な示唆を与えてくれる。また欧米での研究の最近の焦点は７０年代の大インフレに移っている（Mayer, Thomas (1999), *Monetary Policy and the Great Inflation in the United States: the Federal Reserve and the Failure of Macroeconomic Policy, 1965-79*, Cheltenham: Edward Elgar. Nelson, Edward (2005), “The Great Inflation of the Seventies: What Really Happened?” *Advances in Macroeconomics*, Vol.5, No.1, Article 3）ここでの焦点もやはり政策形成研究における経済政策思想の再発見である。マイヤー、ネルソンともに、当時の経済思想にみられた金融政策軽視が大インフレにつながったとしている。なお、アメリカではすでに一般向けの書籍も刊行されており、いよいよ７０年代研究の蓄積をうかがわせる（Samuelson, Robert J. (2008), *The Great Inflation and Its Aftermath: The Past and Future of American Affluence*, New York: Random House）。

（２）これに対して日本では７０年代についての研究文献は意外に少ない。経済学史・政策経済思想史研究は、７０年代はおろか、マクロ経済政策についてもほとんど分析が及んでいないのが現状である。たとえば池尾愛子編（1999）、『日本の経済学と経済学者: 戦後の研究環境と政策形成』（日本経済評論社）でもマクロ経済政策はほとんど言及されていないし、猪木武徳（2002）、「戦後日本の経済政策」社会経済史学会編『社会経済史学の課題と展望』（有斐閣）、314－324 頁の展望論文でも同様である。経済史に目を転じれば、岡崎哲二（1999）、「日本の金融政策とマクロ経済：歴史的パースペクティブからの再評価」（『フィナンシャル・レビュー』6 月号）がある。岡崎論文は日銀の金融政策が卸売物価指数に反応して運営されていることを明らかにしたもので重要であり、しかも当時の政策担当者の回顧録を利用しているものの、経済学の議論との対応はまだなされていない。また、最近では日本のブレトン・ウッズ国際通貨制度への関与を論じた伊藤正直（2009）、『戦後日本の対外金融：360 円レートの成立と終焉』（名古屋大学出版会）は、７０年代大インフレとも関連する貴重な貢献である。本研究ではより７０年代全体のマクロ経済政策を対象としたい。なお、マクロ経済学の観点からは伊藤隆敏らが７０年代から９０年代にかけての金融政策についての研究を行い、日銀の金融政策思想を明らかにしようとしている（Cargill, Thomas F., Michael M. Hutchison, and Takatoshi Ito (1997), *The Political Economy of Japanese Monetary Policy*, Cambridge, MA: The MIT Press）。関連するものとして政治学・行政学者によるものがある（真渕勝（1994）、『大蔵省統制の政治経済学』中公叢書。同（1997）、『大蔵省はなぜ追いつめられたのか：政官関係の変貌』中公新書。上川龍之進（2005）、『経済政策の政治

学――90 年代経済危機をもたらした「制度配置」の解明 』東洋経済新報社)。これらの研究からは多くを学び得るものの、７０年代について事象、政策、思想の関連を包括的に研究したものはこれからといえる。

２．研究の目的

（１）現在にいたるまで経済危機は繰り返して起きている。今後同じ危機を繰り返さないために、あるいは危機の影響を最小限にとどめるには歴史に学ぶことが重要である。本研究「経済危機と経済学：１９７０年代日本のマクロ経済思想と経済政策の歴史的考察」は、経済学が経済危機にいかに対応したか、経済危機が経済学にどのような影響をもたらしたかという二つの観点から、１９７０年代日本におけるマクロ経済学と経済政策の関連を歴史的に探求する。その目的は危機の時代にはいかなる経済政策を運営するのが望ましいか、そして危機の経験から経済学は何を学びうるかという問題に、経済学史の観点から一つの示唆を与えることにある。

（２）本研究の目的は３点ある。第一に、本研究はこれまでまだ世界でも日本でも系統的に研究されていない第二次世界大戦後のマクロ経済学とマクロ経済政策の関連、とくに経済事象、経済政策、経済政策思想の相互作用について、体系的な研究を開始するものである。とはいえその範囲は広大であり、何らかの焦点が必要となる。本研究ではその焦点を１９７０年代日本と経済危機の二つに求めたい。この二つに絞る理由は、７０年代のマクロ経済学と経済政策については、海外ではそれなりの研究が蓄積されているのに対して日本ではまだほとんど始まっておらず、この分野を開拓することに意義があると考えるからである（①で後述)。また、経済危機への注目は本研究の持つ実践的政策的含意をより明確に示すことになるからである。

（３）本研究の第二の目的は、戦後日本のマクロ経済学と経済政策への注目にある。日本について興味深いのは、マクロ経済の成果についての評価の変遷である。たとえば６０年代に高度経済成長を経験した日本は７０年代に大きなインフレ（文献では大インフレ Great Inflation と呼ばれる)を経験した。しかし、７０年代初頭における。こうした変化に対して、マクロ経済政策がどの程度寄与したかについては、経済学者の間でも大きな議論がある。本研究では、そうした政策の効果なり寄与についても研究協力者とともに検討を加えるが、中心となるのは政策をめぐる議論の歴史的研究である。

（４）本研究の第三の目的は、経済危機の時代に焦点を絞ることである。経済危機のときには、これまでの政策の問題が明らかになり、既存の思想の前提が問いなおされる。危機の時代にこそ、政策と思想の関係は緊張をはらんだものになる。経済事象、経済政策、経済政策思想の関係が問い直される危機の時代に、政策思想もまた変化する。その具体的な過程を理解することは今後のわれわれの危機への対応を考える上でも有益な材料を提供すると考えられる。

３．研究の方法

本研究の方法論としては、次の３点を挙げたい。
（１）三つの歴史：マクロ経済理論史、マクロ経済政策史、経済制度史を組み合わせること
（２）二つの評価：政策効果評価と政策形成過程評価を組み合わせること
（３）一つの叙述：理論的枠組みと計量分析を重視して、「印象バイアス」を避け、理論に裏付けられた歴史叙述、いわゆる分析的叙述(analytic narrative)をめざすこと。

４．研究成果

（１）70 年代の金融政策、日銀の経済政策思想の研究。論文⑦は総論であり、海外の研究と比較しながら 1970 年代の日本経済の大インフレの原因が金融緩和の行き過ぎにあったことを論じ、その原因として、ブレトン・ウッズ体制後の円高に対する恐怖だけでなく、金融政策の責任を認めない政策思想の誤りがあった可能性について論じている。論文①は、日本銀行の政策思想を戦前からたどるもので、日本銀行の政策思想は、古典派、ケインズ派、マネタリストと、それぞれの時期の思想を自分たちなりに吸収していたことを明らかにしている。
（２）70 年代に絶大な影響を与えた経済学者ミルトン・フリードマンについての研究。論文⑤、学会報告②を通じて、ミルトン・フリードマンの業績を概観し、ことにマクロ経済学、金融理論、国際通貨制度の変動相場制についての議論においては彼の議論がいまだに前提となっていることを論じた。
（３）70 年代に起きたブレトン・ウッズ体制の崩壊を理解するための国際通貨制度と政策思想史についての研究。論文④では、国際通貨制度全体について、制度と思想の共進化の過程を描いた。
（４）70 年代のケインジアンとマネタリスト

の対立についての日本の経済思想の研究。論文②、学会発表④で、日本におけるケインジアンに貨幣理論が奇妙に欠落していることを歴史的に明らかにした。また、（１）とも関連する日本におけるマネタリストの弱さについても明らかにした。
（５）さらに日本の経済思想を理解するための背景の研究。論文⑥では、戦前期の日本の経済が医学者の思想を研究し、当時の大恐慌において柴田敬が斬新な研究を行っていたことを明らかにした。
（６）70 年代を含む現代日本の経済危機が世界にもつ教訓。論文③では、経済危機の歴史から学ぶという観点から日本の経済危機が経済政策思想の危機であったと論じ、危機から脱するためには経済政策の転換が必要であると訴えた。
（７）図書（①から④）に見られる一般向けの啓蒙活動。ことに図書①、②ではマネーと国際通貨制度の重要性を強調し、②では 70 年代の経験を含むマネーの歴史について説明している。図書③、④は、研究（１）の成果を現代のデフレ不況をめぐる論争に応用したものである。基本的には日銀の経済政策思想が金融政策を決めており、90 年代以降の金融政策の失敗も政策思想の問題であることを論じている。④ではやはり（１）のエッセンスを生かして、より歴史的な記述を行っている。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計７件）

① Masazumi Wakatabe,"Central Banking, Japanese Style: Economics and the Bank of Japan, 1945-1985," *History of Economic Thought and Policy*, 査読有、Vol.2, No.1, 2013, 141-160
② 若田部昌澄「日本のケインズ主義に貨幣理論がないのはなぜか」岩田規久男・浜田宏一・原田泰編『リフレが日本経済を復活させる：経済を動かす貨幣の力』中央経済社、査読無、2013、249-285
③ Masazumi Wakatabe, "Turning Japanese? Lessons from Japan's Lost Decade to the Current Crisis," Center on Japanese Economy and Business, Columbia University, 査読無、2012.http://academiccommons.columbia.edu/download/fedora_content/download/ac:155609/CONTENT/WP_309.pdf
④ 若田部昌澄「グローバル化と貨幣―ジョン・ロックからベン・バーナンキへ―」経済学史学会ほか編『古典から読み解く経済思想史』ミネルヴァ書房、査読無、2012、37-61。
⑤ 若田部昌澄「歴史としてのミルトン・フリードマン：文献展望と現代的評価」『経済学史研究』査読有、第 54 巻第 1 号、2012、22 - 42
⑥ Robert W. Dimand, and Masazumi Wakatabe "The *Kyoto University Economic Review* (1926-1944) as Importer and Exporter of Economic Ideas: Bringing Lausanne, Cambridge, Vienna, and Marx to Japan," in Kurz, Heinz, Keith Tribe, and Tamotsu Nishizawa (eds.), *The Dissemination of Economic Ideas*, Cheltenham: Edward Elgar, 査読無、2011.
⑦ Kataoka, Goushi, and Masazumi Wakatabe, "The Great Inflation in Japan: How Economic Thought interacted with Economic Policy," TCER Working Paper、.査読有、2011

〔学会発表〕（計５件）

① Masazumi Wakatabe "Turning Japanese? Lessons from Japan's Lost Decade to the Current Crisis," Paper presented at the Third ESHET-JSHET Joint Workshop, Corte, France, September 12-15, 2012.
② 「ミルトン・フリードマンを論じる」経済学史学会第 75 回大会、2011 年 11 月 6 日、京都大学。
③ "Central Banking, Japanese Style: Economics and the Bank of Japan, 1945-2010," Paper presented at Workshop on Economic Theories and Policies: A Historical Perspective, 1945-2002, University of Rome Tre, September 21-22, 2011.
④ "Is there any cultural difference in economics?: Keynesianism and Monetarism in Japan," Paper presented at the 33rd annual meeting of the History of Economics Society, University of Notre Dame, South Bend, Indiana, June 17, 2011.
⑤ Goushi Kataoka, Masazumi Wakatabe, "The Great Inflation in Japan: How Economic Thought interacted with Economic Policy,"

Paper presented at the 32nd annual meeting of the History of Economics Society, Syracuse, New York, USA, June27, 2010.

〔図書〕（計４件）

① 若田部昌澄、他、筑摩書房、『本当の経済の話をしよう』、2012、318
② 若田部昌澄、光文社、『もうダマされないための経済学講義』、2012、275
③ 若田部昌澄、他、東洋経済新報社、『伝説の教授に学べ！本当の経済学がわかる本』、2010、270
④ 若田部昌澄、講談社、『「日銀デフレ」大不況』、2010、303

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
若田部　昌澄（WAKATABE MASAZUMI）
早稲田大学・政治経済学術院・教授
研究者番号：00240440

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：